様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　４月　３０日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：２００７　～　２０１０
課題番号：１９７００５０７
研究課題名（和文）　オセアニアにおける新たな開発援助としてのスポーツの活用可能性に関する研究
研究課題名（英文）　A study of the potential of sport for national development and international cooperation
研究代表者小林　勉　（KOBAYASHI TSUTOMU）
中央大学・総合政策学部・准教授
研究者番号：２０３３４８７３

研究成果の概要（和文）：
オセアニアにおいて途上国の人々が余暇活動を通じていかなる結びつきを展開し、それが彼らの生活にどのような影響を与えているのかを、スポーツ実践を介して象られる彼らのネットワークに着目しながら検討した。そして、在地の人々がいかにして彼らなりのソーシャル・キャピタルを形成し、自らの生活を安定化させようとしているのかについて、「雇用機会の確保」と「生活資源の獲得」という観点から明らかにした。
研究成果の概要（英文）：
The aim of this study is to report the findings of a study that explored the nexus between sport and social capital in Oceania. Specifically, it explored the social networks that are created through sport, and the resources that are available to members through these networks. The results show that some organized sport clubs in Oceania are sites for significant social capital development, whereby club members receive resources such as employment, accommodation, food and transportation, as well as financial incentives. In particular, it is evident that club members are able to access employment opportunities that their level of education would not normally make possible.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	700,000	0	700,000
２００８年度	500,000	150,000	650,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	2,200,000	450,000	2,650,000

研究分野：スポーツ社会学、国際開発学
科研費の分科・細目：　健康・スポーツ科学、スポーツ科学
キーワード：　国際協力、ソーシャル・キャピタル、スポーツ振興

１．研究開始当初の背景
「いかに社会統合を生み出すか」といった問題に対し、注目を集めている概念に「ソーシャル・キャピタル」がある。ソーシャル・キャピタルとは、信頼や規範、ネットワークといった、目には見えないが成長や開発にとっ

て有用な資源と考えられるもので、これを経済的資本と同様に計測可能かつ蓄積可能な「資本」として位置づけたものがソーシャルキャピタルであり、近年では世界銀行や他の援助機関においても、この概念に対する関心が急激に高まってきていた。しかしながら、実際の現場における具体的な開発への活用については議論が定まっておらず、その有効性や形成・強化方法を明らかにするには至っていなかった。また、ソーシャル・キャピタルをスポーツという視点から捉え、それを途上国の開発問題や国内のコミュニティ再編の問題に結びつけて検討した実証的な研究も、それまでなされていなかった。そこで、民族の壁を越えて大きな影響力をもつとされるスポーツとソーシャル・キャピタルの関係性を検討し、それを開発戦略のひとつとして「活用」する可能性を検証しようと考え、その形成過程や強化方法を解明しようと考えたのが本研究の出発点である。

２．研究の目的

この研究を通して、これまで展開されてきたオセアニアにおけるスポーツ分野の国際協力の実態を跡付けながら、現地におけるスポーツの展開、外部からのスポーツ振興施策の受容のされ方について明らかにする。

そして、オーストラリアを中心に展開される南太平洋へのスポーツ振興施策の動向を整理しながら、島嶼国の人々がそれをいかに受容し、スポーツを介してネットワークを形成するのかについて明らかにする。スポーツが開発戦略のひとつ（ソーシャル・キャピタル）として機能していくうえでの種々の要因となっているものを見出し、最貧国のひとつに分類される国が散在する地域の開発援助という課題に、スポーツがどの程度貢献できるのかを調査し、結論を導くことが本研究の目的である。

３．研究の方法

主に以下の方法で研究が展開された。

（１）ソーシャル・キャピタルを巡る議論の整理：ブルデューやコールマン、パットナムといった論者たちのソーシャル・キャピタルを巡る議論の変遷を踏まえてソーシャル・キャピタルの考え方が整理されたともに、ソーシャル・キャピタルの着想の起点ともなったグラノベッターやバート、リンなどの社会的資源論の研究動向などについても検討された。

（２）スポーツから捉えたソーシャル・キャピタル論の検証： ソーシャル・キャピタル論の射程からスポーツが世界でどのように捉えられてきているのかについて、英語の文献を中心に、その研究動向が整理された。

（３）オセアニアにおけるスポーツ振興の動向の把握：1994 年以降、オーストラリア政府は 14 の太平洋諸国やアフリカの途上国に対して、様々なスポーツプログラムを展開してきている。オーストラリアによるそうしたオセアニアの途上国へのスポーツの国際協力の動向について跡付けられた。

（４）新たな開発援助としてのスポーツの活用可能性の検証：オーストラリアを中心に、外発的に導入されるスポーツ振興に対して、途上国の人々はどのようなインパクトを受けているのかについて検証された。また、現地の余暇活動を通じて在地の人々がいかにして彼らなりのソーシャル・キャピタルを形成しようとしているのかが焦点化された。そしてそれが彼らの暮らしにいかなる影響をもたらしていたのかについて検証された。

４．研究成果

（１）スポーツとソーシャル・キャピタルに関する研究動向の整理：パットナムやユスレイナーたちが、もっぱらソーシャル・キャピタル形成に資するスポーツという方向に議論を向けたのに対して、近年の研究視角の特徴は、ソーシャル・キャピタル醸成におけるスポーツの効能に過剰に論じる傾向を自制しながら、それにより、見落とされるスポーツの負の影響への着目を示唆する傾向にあることを明らかにした。そして、こうした研究者たちに共通する意図は、スポーツがソーシャル・キャピタル形成に好影響を与えうるが、同様にネガティブな影響を与えることもあるという、双方の混交した局面を問題にする方向に議論を向けることにある点についてもまとめることができた。

（２）開発のコンテクストにおけるスポーツの世界的な研究動向の把握：地域活性化やコミュニティ開発のシンボルとして、開発のコンテクストにおける地歩を固めつつあるスポーツだが、スポーツ振興の意義がソーシャル・キャピタルと関係づけられて語られるようになってきた理由には、少なくとも以下のような政府の意向が存在することが明らかにされた。

①小さな政府が指向されるなかで「政府の役割を補完するもの」としてスポーツ組織に期待を寄せているということ。

②数ヵ年で政策評価が下され、課題達成率が客観的に可視化される政策が優先されがちとなるなかで、実際に政府は国際競技力の向上を焦点化し、政策課題の達成度を可視化、スポーツ振興に対する政権の実行能力の可視化を求めるようになってきている。そうしたコンテクストにおいてソーシャル・キャピタルは、公的資金をスポーツに投入する建前として充分公平な表現を備えているため、国際競技力を高める施策に対する絶好の説明理由のひとつとなってきているということ。

以上のように、スポーツとソーシャル・キャピタルとが結び付けられる背景には、「スポーツそのものの発展」とは異なる次元で政府の政治願望がまぎれこみ、時にきな臭い政治性を帯びながら、そこにはいくつもの検討すべき陥穽があるということを明らかにした。

（３）新たな開発援助としてのスポーツの活用可能性の検証：途上国の人々は開発を推進する側が感受し得ない部分で、自分たちの生活を向上させようと工夫を凝らしている場面は少なからず存在する。これまであまり検討されてこなかった人々のそうした生活戦略に着目しながら、在地の人々がいかにして彼らなりのソーシャル・キャピタルを形成し、自らの生活を安定化させようとしているのかについて明らかにすることができた。とりわけ人々が余暇活動を通じていかなる結びつきを展開し、それが彼らの生活にどのような影響を与えているのかを、スポーツ実践を介して象られる彼らのネットワークに着目しながら検討することで、そこで醸成されるソーシャル・キャピタルが彼らの「雇用機会の確保」と「生活資源の獲得」に、かなり大きな影響をもたらしていることを明らかにすることができた。開発プロジェクトとして「コミュニティ開発」や「セーフティネット」という言葉を使わずとも、在地の人々は彼ら独自のやり方でそれらに相当する営為を試み、自分たちの生活向上を目指そうとする局

面を実証できたことで、これまであまり検証されなかったドナー側の構想しえないインパクトについて明らかにすることができた。そしてそのことは、社会開発ツールとして各国で展開されつつある数々のスポーツプログラムに対して、開発プロジェクトのような一時的な利益誘導によってもたらされる効果とは異なる次元で繰り広げられる現地の人々の生活戦略等、いくつかの留意すべき点があることを示唆できるものとなった。

（４）国際共同研究プロジェクトの構築：スポーツ政策や「ソーシャル・キャピタルとスポーツ」について、世界的に著名なラッセル・ホイやマシュー・ニコルソンなどをはじめ、各国の研究者たちと積極的に研究交流を重ねることができたことで、「スポーツが与える社会的インパクト」に関する種々の研究プロジェクトが萌芽期の段階にある（実際、彼らとの共同研究の成果は、現在、国際ジャーナル誌に投稿中である)。将来的に益々需要が高くなると考えられるそうした一連の研究課題に対して、国際共同研究プロジェクトの基盤を固めることができたことは、本研究の特筆すべき成果のひとつであるといえる。また同時に、そうした共同研究プロジェクトの構築は、今後、日本におけるスポーツ政策研究の水準を大きく高めるものと期待できる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２　件）
①小林勉，イギリスにおけるスポーツ政策の変遷:1950年代から1990年代までを事例に，体育研究，42号，pp.81－90，2008年，査読有り

②小林勉，スポーツが触発する国民意識への新たなモメント ： 南太平洋で展開されるFIFAのサッカー振興の事例から，国際開発研究フォーラム，35号，pp.1－20，2007年，査読有り

〔学会発表〕（計　件）

〔図書〕（計２　件）
①小林勉「スポーツによる開発の実験と実践：開発問題とスポーツの接点」『新たな「政策と文化の融合」：総合政策の挑戦』中央大学総合政策学部編，中央大学出版部，pp.279-293,2009年

②小林勉、中央大学出版、 Approaches to building social capital through sport（英文・分担執筆)、2010、1－7

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
小林　勉（KOBAYASHI TSUTOMU）

研究者番号：２０３３４８７３

(2)研究分担者
（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：